

大豆管理情報（第4号）

令和7年8月20日
農業技術課 広域普及指導センター

1 気象経過（図1）

（1）気温

5月下旬の平均気温は、17.8℃（対平年差－1.2℃）と平年に比べ低かった。
6月の平均気温は、23.4℃（同＋2.0℃）と平年に比べかなり高かった。
7月の平均気温は、29.2℃（同＋3.7℃）と平年に比べかなり高かった。
8月1～3半旬の平均気温は、28.1℃（同＋0.6℃）と平年並だった。

（2）降水量

5月下旬の降水量は、40.5mm（対平年比112%）と平年並であった。
6月の降水量は、129.0mm（同75%）と平年並であった。
7月の降水量は、31.5mm（同13%）と平年に比べかなり少なかった。
8月1～3半旬の降水量は、327.5mm（同377%）と平年に比べかなり多かった。

（3）全天日射量

5月下旬の平均全天日射量は、16.8MJ/m²/日（対平年比88%）と平年に比べ少なかった。
6月の平均全天日射量は、18.2MJ/m²/日（同105%）と平年並であった。
7月の平均全天日射量は、23.2MJ/m²/日（同140%）と平年に比べかなり多かった。
8月1～3半旬の平均全天日射量は、17.2 MJ/m²/日（同92%）と平年に比べ少なかった。

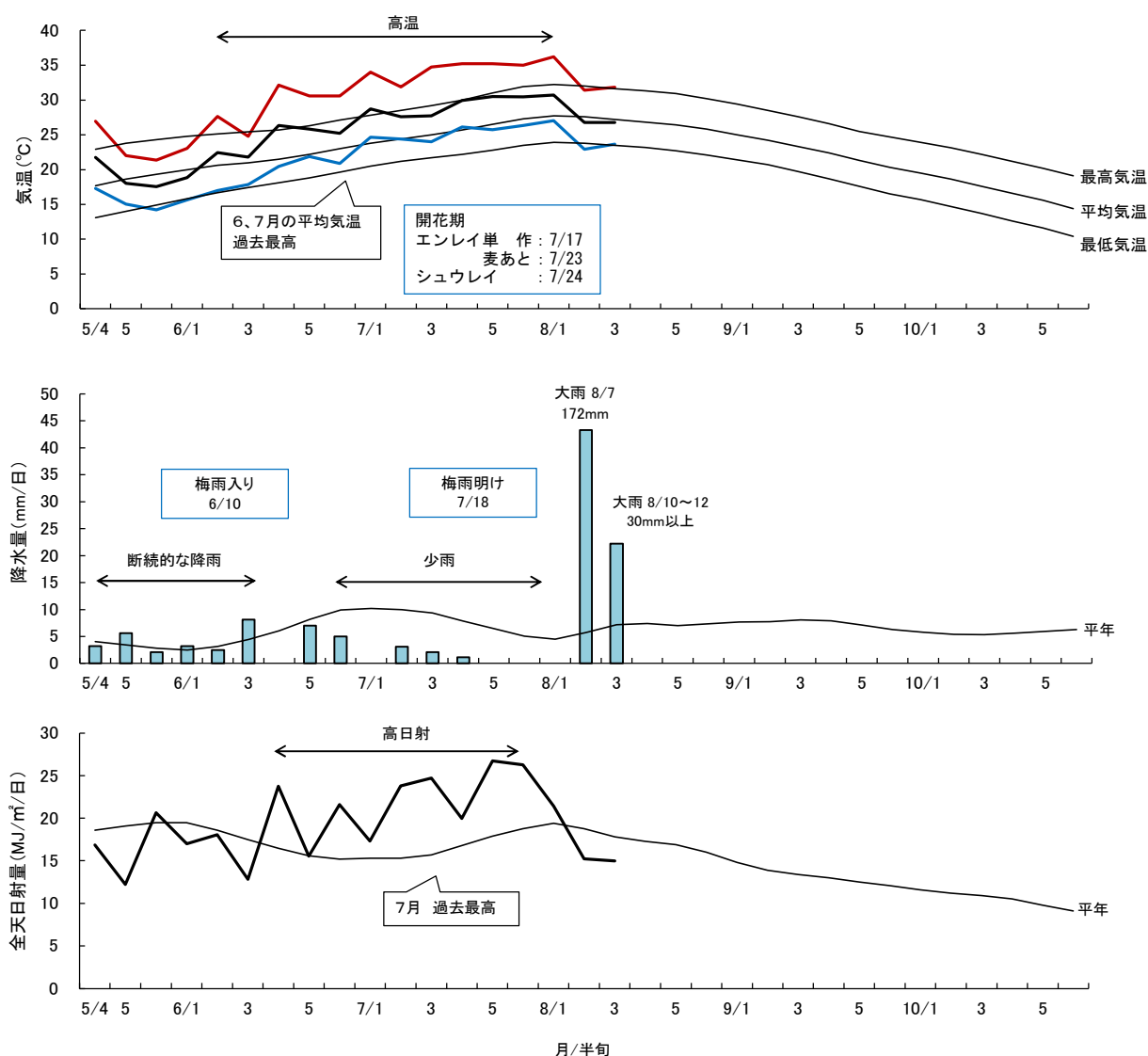


図1 令和7年の気象経過（富山地方気象台）

2 生育経過（生育観測ほデータ）

（１）エンレイ（単作）

近年に比べ、主茎長、本葉葉数は並、一次分枝数は0.5本多くなっている。

（２）エンレイ（麦あと）

近年に比べ、主茎長はやや短く、本葉葉数は0.1葉多く、一次分枝数は並となっている。

（３）シュウレイ

平年に比べ、主茎長は短く、本葉葉数は0.4葉少なく、一次分枝数は0.3本少なくなっている。

表1 大豆生育観測ほ調査結果（8月20日調査）

品種	地域	播種月日 (月日)	栽植本数 (本/㎡)	主茎長 (cm)	本葉葉数 (葉)	一次分枝数 (本)	開花期 (月日)
エンレイ	単作	R7	16.7	71.5	12.7	3.1	7月17日
		R6	17.7	70.6	12.4	2.8	7月18日
		近年	16.6	75.3	12.7	2.6	7月19日
		近年比・差	-1	100	95	0.0	-2
	麦あと	R7	16.1	65.6	12.5	2.9	7月23日
		R6	16.4	64.1	12.1	3.2	7月19日
		近年	16.8	73.1	12.4	2.9	7月20日
		近年比・差	2	96	90	0.0	3
シュウレイ	単作	R7	11.7	53.7	11.8	3.1	7月24日
		R6	11.7	66.5	11.9	3.5	7月19日
		平年	14.9	65.9	12.2	3.4	7月23日
		平年比・差	3	79	81	-0.4	1

注1) 調査ほ場数: エンレイ(単作5、麦あと3)、シュウレイ(単作2、麦あと1)

注2) 平年値はH27～R6、近年値はR2～6

注3) 平年比(近年比): 栽植本数・主茎長、平年差(近年差): 播種日・本葉葉数・一次分枝数・開花期

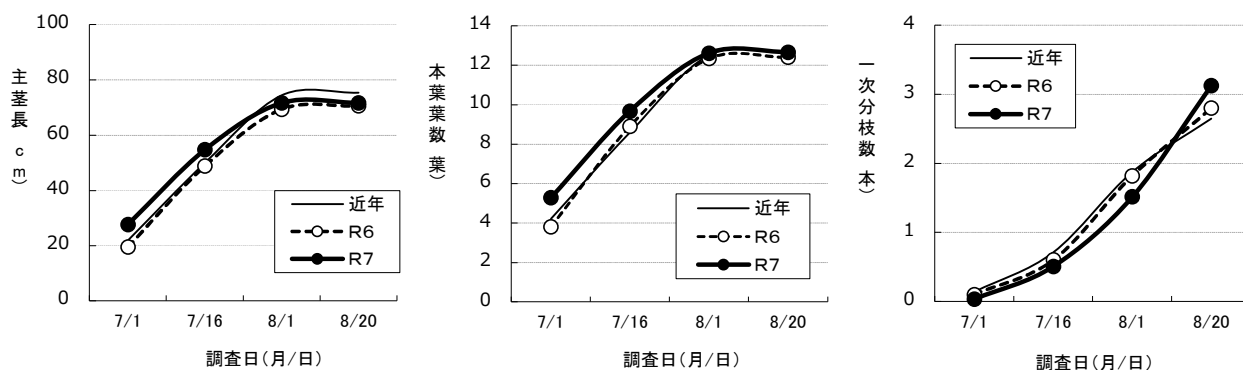


図2 単作エンレイの生育経過

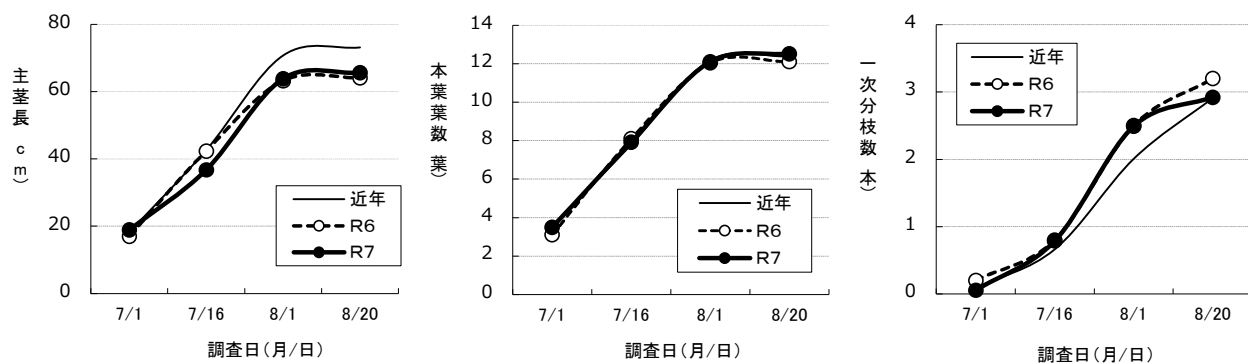


図3 麦あとエンレイの生育経過

3 当面の技術対策

- ・開花期頃からの高温・干ばつの影響により、着莢数が少なくなっている。今後も、高温・少雨が予報されていることから、莢数確保と子実肥大を促すため、9月上旬頃まで降雨に頼らず積極的に畦間かん水を実施する。
- ・大豆カメムシ類が多発していることから、2回の基本防除(カメムシ類及び紫斑病)を徹底する。常発地域や2回の基本防除後に発生が多くみられる場合は、9月上旬に追加防除を実施する。

(1) 排水対策

- ・降雨後の排水や畦間かん水の入排水を速やかに行うため、再度、溝の連結や排水口の掘下げを実施する。

(2) 畦間かん水

- ・落莢の防止による莢数の確保と青立ちの発生防止、百粒重の確保や被害粒の発生防止を図るため、9月上旬頃まで晴天が3日以上続くと見込まれる場合は、降雨に頼らず積極的に畦間かん水を行う。
- ・かん水は短時間で実施し、ほ場全体に水が行き渡ったら、水口をしっかり止め速やかに排水する。
- ・用水が下流域まで行き渡るように、地域での計画的かつ効率的な水利用に努める。

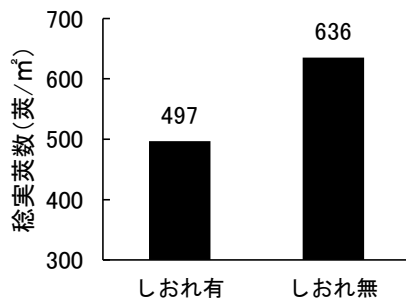


図4 開花期以降の水不足が莢数に及ぼす影響
(R5 現地ほ場、成熟期調査)
注) 開花期翌日～8月下旬までの降水量: 37 mm

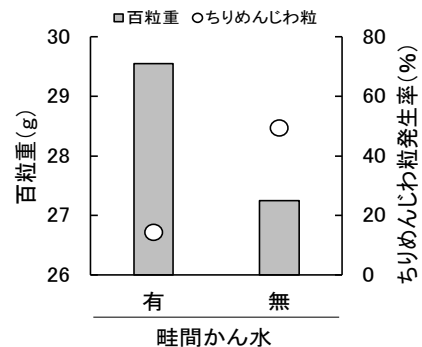


図5 かん水の有無が百粒重やしわ粒の発生に及ぼす影響 (H24 富山農振セ)
注) かん水有区: かん水2回実施

(3) 病虫害防除 大豆カメムシ類: 8月14日注意報発表

【基本防除】

- ・大豆カメムシ類の発生状況は、0.58 頭と平年 (0.13 頭) よりかなり多くなっている (8月8～12日調査、農研)。
- ・子実肥大期の加害は被害粒の増加や子実の肥大停止により青立ちの発生につながるため、紫斑病とカメムシ類に対して、2回の基本防除 (2回目: 8月4～5半旬頃) を徹底する。
- ・同一系統の薬剤の連用は避け、莢や茎葉に薬剤が十分かかるように散布する。

【随時防除】

ア 大豆カメムシ類 (写真1、2)

- ・山際等の常発地域や2回の基本防除後に発生が多くみられる場合は、9月上旬に追加防除を実施する。



写真1 大豆を加害する主なカメムシ



写真2 カメムシ類の吸汁被害

イ ハスモンヨトウ（写真3）

- ・若齢幼虫による白変葉被害がみられたら、速やかに被害葉を取り除き、ほ場外で処分するとともに、発生状況に応じて薬剤を散布する。
- ・防除の際は葉裏にも薬剤が十分かかるように散布する。



写真3 ハスモンヨトウによる白変葉被害

ウ ハダニ類（図6）

- ・生育観測ほにおけるハダニ類の発生株率は49.8%と平年（19.7%）に比べ高くなっており（8月8～12日調査、農研）、今後、高温・少雨が続いた場合、被害の拡大が懸念される。
- ・多発すると子実が小粒化し減収する。
- ・葉の黄化が拡大している場合は、速やかに防除を行う。
- ・防除の際は葉裏にも薬剤が十分かかるように散布する。

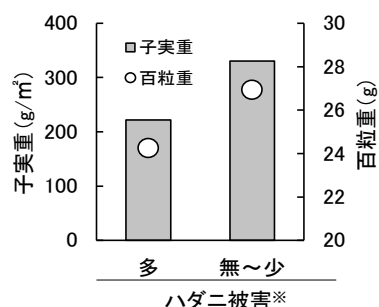


図6 ハダニの被害程度が子実重と百粒重に及ぼす影響 (R5 現地ほ場)

※9月上旬の被害、多：ハダニによる葉の黄化が株の80%以上、無～少：10%以下

エ 葉焼病（写真4）

- ・強風雨でまん延し、多発すると収量、品質が低下する。
- ・9月上旬頃まで台風等の強風雨による葉の損傷が予想される場合は、その直前又は直後に「Zボルドー」等で防除する。



写真4 葉焼病

オ 白絹病（写真5）

- ・高温・多湿条件で発病が助長される。発病すると黄化・萎凋し、症状が進むと立ち枯れる。
- ・排水対策を徹底するとともに、発生初期に発病株の抜き取りや薬剤散布を行う。
- ・菌核により土壤伝染するため、多発ほ場では連作を行わない。水稻作とのローテーションにより菌密度の低減を図る。



写真5 白絹病
(左) 萎凋株 (右) 株元の症状

(4) 雑草対策（写真6、7）

- ・ほ場内の大型雑草や難防除雑草は、雑草が結実する前に防除（除草剤塗布、地際からの刈取り等）を徹底する。
- ・特に、帰化アサガオ類やイヌホオズキ類は水田周辺等も含め防除するとともに、防除後も再度発生することがあるため、継続的に防除する。



写真6 大型雑草
(イチビ)



写真7
イヌホオズキの液果